中日新聞 2016年(平成28年)9月28日(水)

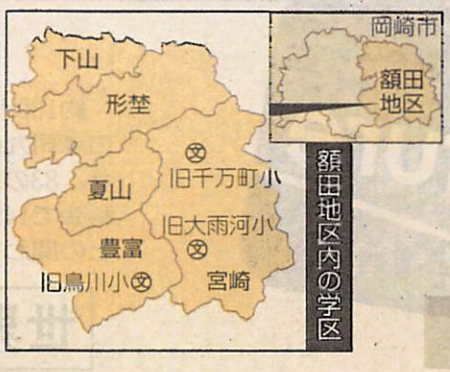
山里の異変

旧額田町合併10年

地域の絆 維持に必死

旧額田町が岡崎市に合併して今年で十年を迎えた。市の面積の四割を占め、主要な水源地でもあるが、人口の急減、大半を占める山林の荒廃など環境は激変している。額田地区の現状を四回にわたり報告する。

（この連載は森田真奈子が担当します）



額田地区内の学区

① 小中高生ゼロの町

激しく蛇行する急な坂道を上り切ると、のどかな山村が現れる。岡崎市の中心部から二十五キロ。四十一世帯、九十五人がひっそりと暮らす千万町町に週末、三十人の親子連れが集まった。

旧千万町小学校で開かれた山里体験イベント。都市部から来た親子たちがまき割りや間伐体験をする傍らで、町の人たちはイノシシ肉のバーベキューや五平もちなど昼食の準備に忙しい。山本君子さん(七七)は「学校が閉じても、これがあるから地域がつながり、元気でいられる」と笑う。

小学校は二〇一〇年、五人の児童を最後に閉校。それまで旧千万町学区（千万町町、木下町）の人たちは小学校を中心に地域活動にいそしみ、また、子どもと学校を自分たちの宝として支えてきた。へき地ゆえに給食のトラックが来なかった昭和三十年代には親が毎日交代で十五キロのパン箱をかつぎ、五キロの急坂を歩いて運んだ。

閉校から六年、ついに千万町町には小学生から高校生までの子どもはいなくなった。「小学校をずっと心のふるさとにしたい」。最後の教頭を務めた荻野嘉美さん(六三)は今も月一回ほど、まるで定例の学校行事みたいに催しを企画している。

住民の半数以上が六十五歳を超える。催しは若い世代を呼び込む狙いもあるが、まだ定住には結び付いていない。荻野さんは「今いる住民が元気でなければ、外から人が来るわけがない」。先細りが見える中でも、地域を守るために懸命な取り組みを続ける。

同じ年に閉校した旧大雨河小学校は、ほとんど校舎が使われなくなった。旧大雨河学区の東河原町、雨山町、大代町の三集落の交流も疎遠になり、統合先の宮崎小学校の学校行事に出かける人もまれだ。

だが、地元の地域おこし団体「やまびこの会」の代表山本一郎さん(六七)らが、年四回ほど校舎の清掃を呼び掛けると、毎回六十人近くが参加する。「過疎とともに地域の絆まで弱めてはいけない。みんな何とかしたいと思っている」と山本さん。これからは旧学区の人たちが再び小学校に集まり、地域を考える場をつくるつもりでいる。

(上)旧千万町小の校庭で、五平もちやバーベキューの準備をする地元の人たち＝岡崎市千万町町で (下)昭和30年代、給食のパン箱を背負い山を登る人＝「千万町小学校統合記念誌」より

メモ　2006年の合併時に約9400人だった額田地区の人口は現在、約8200人。年平均100人以上と合併前の10年間と比べて、3倍の急速なペースで減少が進む。額田地区全体に8校あった小学校は10年に5校に統廃合された。